国語プリントNo.（　　）

年　組　番　名前

配布日　月　日　曜

羅生門④　下人の成長　論文

1年

「羅生門」の「下人」は、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」のところで〈大人〉に成長した。その理由を次に説明する。

「下人」は初め「飢え死にするか盗人になるか。」という「問い」を持っていた。しかし、先に述べた77頁13行目で下人は、「自分の心に勇気が生まれてきたこと。」に気づいた。よって、「下人」の初めの問いは選択肢の中から飢え死にということが追い出されていたことになった。なぜなら、「老婆」が死人の女の髪の毛を抜くことをこの死人の女が大目に見てくれるであろうと言ったからである。

〈大人〉になったと言うことは、それ以前は〈子供〉ということになる。たとえば、二文前の77頁11行目の「下人は、太刀をさやに収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。」という文では、この一瞬ではまだ生まれてきた勇気に気づいていないという理由でそこは〈子供〉ということが分かる。また、二文あとの77頁15行目の「そうして、またさっきこの門の上へ上がってこの老婆を捉えたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。」という文では、どんな勇気であるかも分かっていたという理由で〈大人〉ということが分かる。

以上のことより、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」が下人が〈大人〉になった人生の転機である。

1年

「羅生門」の「下人」は、78頁2行目の「下人は、飢え死にするか盗人になるか迷わなかったばかりではない。」のところで〈大人〉に成長した。その理由を次に説明する。

「下人」は初め「飢え死にをしないためとはいえ盗人になっていいのか。」という「問い」を持っていた。しかし、先に述べた78頁2行目で下人は、「飢え死にをしないためには盗人になるしかないこと」に気づいた。よって、「下人」の初めの「問い」は「すれば」を肯定できるようになった。なぜなら、「老婆」が「しかたがなくしたことであろうと」言ったからである。

〈大人〉になったということは、それ以前は〈子供〉ということになる。たとえば、二文前の77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心にはある勇気が生まれてきた。」という文では、すればを肯定できる勇気がなかったという理由でそこは〈子供〉ということが分かる。また、二文あとの78頁5行目の「きっと、そうか。」という文では、ある種の問いが問いでなくなっているという理由で〈大人〉ということが分かる。

以上のことより、78頁2行目の「下人は、飢え死にするか盗人になるか迷わなかったばかりではない。」が下人が〈大人〉になった人生の転機である。

1年

「羅生門」の「下人」は、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」のところで〈大人〉に成長した。その理由を次に説明する。

「下人」は初め「飢え死にするか盗人になるか。」という「問い」を持っていた。しかし、先に述べた77頁13行目で下人は、「自分の心に勇気が生まれてきたこと。」に気づいた。よって、「下人」の初めの問いは選択肢の中から飢え死にということが追い出されていたことになった。なぜなら、「老婆」が死人の女の髪の毛を抜くことをこの死人の女が大目に見てくれるであろうと言ったからである。

〈大人〉になったと言うことは、それ以前は〈子供〉ということになる。たとえば、二文前の77頁11行目の「下人は、太刀をさやに収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。」という文では、この一瞬ではまだ生まれてきた勇気に気づいていないという理由でそこは〈子供〉ということが分かる。また、二文あとの77頁15行目の「そうして、またさっきこの門の上へ上がってこの老婆を捉えたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。」という文では、どんな勇気であるかも分かっていたという理由で〈大人〉ということが分かる。

以上のことより、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」が下人が〈大人〉になった人生の転機である。

1年

「羅生門」の「下人」は、78頁2行目の「下人

copyright © 2008 片桐史裕

は盗人になった。なぜなら、「老婆」が飢え死にをしないために仕方なく盗人になったと言ったからである。

〈大人〉になったということは、それ以前は〈子供〉ということになる。たとえば、二文前の77頁11行目の「下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。」という文では、下人は老婆の話を聞いているときに太刀の柄を左の手で押さえている。このことから、下人は怖がっていることが分かる。という理由でそこは〈子供〉ということが分かる。また、二文あとの77頁15行目の「そうして、またさっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。という文では、下人の最初にあった問いがなくなったということが分かる。という理由で〈大人〉ということが分かる。

以上のことより、77頁13行目の「しかし、しかし、これを聞いているうちに、下人の心にはある勇気が生まれてきた。」が下人が〈大人〉になった人生の転機である。

1年

「羅生門」の「下人」は、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」のところで〈大人〉に成長した。その理由を次に説明する。

「下人」は初め「飢え死にするか盗人になるか迷っていた。」という「問い」を持っていた。しかし、先に述べた77頁13行目で下人は「自分の生き方」に気づいた。よって、「下人」の初めの「問い」は問いでなくなった。なぜなら、「老婆」が生きるためなら悪いことをしてもしかたがないということを気づかせたからである。

〈大人〉になったということは、それ以前は〈子供〉ということになる。たとえば、二文前の77頁11行目の「下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。」という文では、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。」という文では、まだよく老婆の話を理解していないという理由でそこは〈子供〉ということが分かる。また、二文あとの77頁15行目の「そうして、またさっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。」という文では、下人の考えは変化したという理由で〈大人〉ということが分かる。

以上のことより、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」がが下人が〈大人〉になった人生の転機である。

1年

「羅生門」の「下人」は、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心にはある勇気が生まれてきた。」のところで〈大人〉に成長した。その理由を次に説明する。

「下人」は初め「飢え死にするか盗人になるか」という「問い」を持っていた。しかし、先に述べた77頁13行目で下人は「勇気が生まれ、もっと行きたい」ということに気づいた。よって、「下人」の初めの「問い」は飢え死にするのではなく、盗人になった。なぜなら、「老婆」が死人の髪の毛を抜くということは悪いことだと思うが、死人達はそのくらいのことをされてもいい人ばかりだと言ったからである。

〈大人〉になったということは、それ以前は〈子供〉ということになる。たとえば、二文前の77頁11行目の「冷然として、この話を聞いていた。」という文では、老婆の話を理解せずに聞いていたという理由でそこは〈子供〉ということが分かる。また、二ぶんあとの77頁14行目の「それは、さっき門の下で、この男にはかけていた勇気である。」という文では、盗人になるための勇気という理由で〈大人〉ということが分かる。

以上のことより、77頁13行目の「しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」が下人が〈大人〉になった人生の転機である。

copyright © 2008 片桐史裕